

第4章 室蘭市の伝説

1. アイヌ語の地名とその意味

アイヌの人たちは文字を持たず、言葉による言い伝え、即ち「伝承」の豊かな民族で、川や山、小さな岩にも、その特徴をつかんだ名前を付けていました。

北海道の地名のほとんどがそうであるように、室蘭の地名もアイヌ語から転化したものが多く、有名なのは「地球岬」で、ポロ・チケウエ(親である断崖)が転化して、チケウエ チキウ チキユウとなり「地球」の当て字が使われるようになりました。

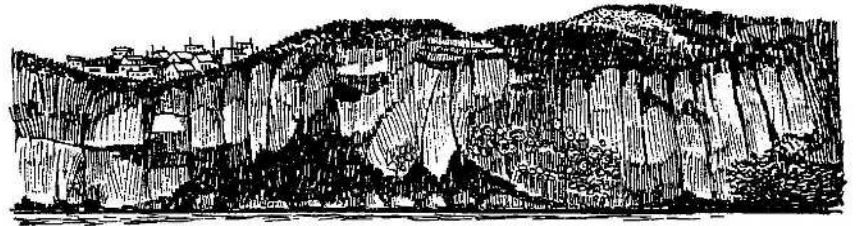
地名	読み方	原名	意味
室蘭	ムロラン	モルラン	小さな下り路
アフルパロ		アフルパル	入る道の口
イタンキ		イタンキ	お椀(クジラの伝説からこの地名が付いた)
絵鞆	エトモ	エンルム	岬(突き出ている頭)
追直	オйнаオシ	オйнаウシ	幣(へい・ぬさ)の群立する所(祭(神事)が多く行われたらしい) 元の漢字は老名牛
小橋内	オハシナイ	オハシナイ	沢口に灌木のある沢(他の説もある)
神代	カミシロ	カミシロコタン	霊山にある祭場
喜門岱	キモンタイ	キムニタイ	山の方の森林
銀屏風	ギンビョウブ	チヌイエピラ	彫刻してある崖
鯨岩	クジライワ	フンベシュマ	鯨岩(室蘭栄高校前の波間に見え隠れする岩)
祝津	シュクツ	シクトウツ	エゾネギの群生する所(他の説もある)
陣屋(べけれおた)	ジンヤ	ペケロタ	白い砂浜(昔、陣屋前は砂浜で海水浴場だった)
測量山	ソクリョウザン	ホシケサンベ	先に出てくる者(沖から舟で帰って来ると最初に 見えてくる山)
地球岬	チキユウミサキ	ポロチケウエ	親である断崖
茶津	チャツ	チャシ	砦(昔、砦があつたらしい)
チャラツナイ		チャラシナイ	滝をなしてサラサラと流れる小川
知利別	チリベツ	チルベツ	鳥の川(昔、鴨が群集していた)
チマイベツ		チマイベツ	焼いて干した鮭の多くある所
トッカリショ		トカリショ	アザラシ岩(昔、アザラシが沢山いた)
ハルカラモイ		ハルカルモイ	食料とる入江
ハワノタ		ハワノタ	声ある砂浜(イタンキ浜の鳴り砂海岸)
ベシポッケ		ベシポッケ	崖下の所(旧室蘭ガスとユースホテルの崖の2カ所をいう)
蓬萊門	ハウライモン	ムカリソ	マサカリ(大きな斧)岩
幌萌	ホロモイ	ポロモイ	親である・大きい湾
母恋	ボコイ	ボコイ	ホッキ貝の群生する所
ポロシレト		ポロシレトウ	大きい岬(崎守町の外防波堤付け根)
幕西	マクニシ	マクヌシ	木の群生している所
マスイチ		マスイチセ	海猫の家(カモメやウミネコの巣が多かった)
モトマリ		モトマリ	静かな入江

は、国指定の名勝とされた絵鞆半島外海岸の地名です。(文化財...34 ページ参照)

輪西とは、もともとは本輪西の地名で、現在の輪西に市街地が移った後に旧輪西を本輪西とした。

2. 銀屏風とムイ岩の伝説

銀屏風には「チヌイエピラ」(彫刻してある崖)というアイヌ語地名がついていました。絵鞆町に近い方がポン(小さなという意味)チヌイエピラ、



マスイチ浜に近いほうがポロ(大きなという意味)チヌイエピラです。そして、その白い断崖が波に洗われて出来た小さな島を、アイヌは「ムイ」(箕(み)という意味で大きなザルのこと)と言っていました。

昔、チヌエカムイ(アワビの神)とムイカムイ(箕の神)が、勢力争いのために、ここで戦ったことがあります。この戦いで、ムイカムイは箕で砂をかき集め立派なチャシ(砦)を築いて立てこもり、チヌエカムイは貝で砂を集めてチャシを作りました。箕と貝では砂を集める量が比べものにならず、アワビの神のチャシは貧弱なものでした。結局、アワビの神は箕の神に負けて逃げ出してしまうのですが、この時に流した涙が岩を削り、その跡がポンチヌイエピラとポロチヌイエピラ、そして、箕の神のつくったチャシが箕の形をした「ムイ岩」だと言うのです。

なお、ムイとは、赤褐色の体内にウロコ型の8枚の貝殻を持つ貝の一種で、アワビを貝の中から抜いたようなものです。大きいものは、体長40cmにも達します。

3. ニラス岩とムカルソの伝説

追直漁港に立って海を望むと、右手の海上に大きな岩が見えます。これが「ニラス岩」(夫婦岩)です。

昔、二人の女神がこのあたりに住んでいましたが、近くに男神がいませんでした。そうかと言って遠くの男神のところに出掛けるのも恥ずかしく遠慮していました。しかし、いつまでたっても男神は現れず、淋しさのあまり女神同士が抱き合って寝てしまったところ、そのまま岩になってしまったと、絵鞆コタンの人々は言い伝えました。

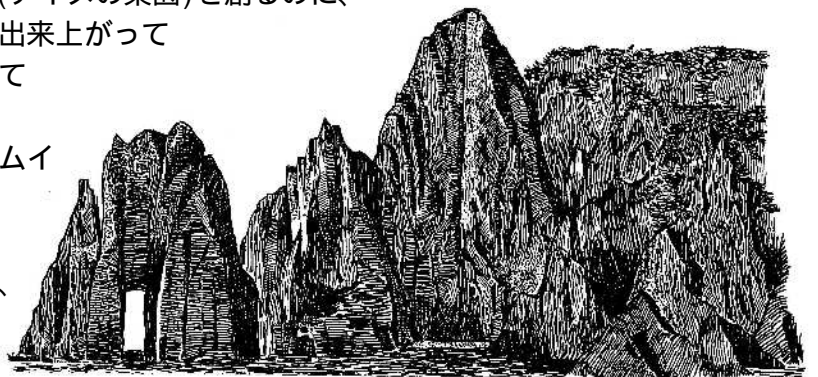
一方、室蘭コタンの人々は、ニラスとは木片のことで、大昔、コタンカラカムイ(天地創造の神)が、この絵鞆半島を創る時、大きなマサカリで木を切り倒したところ、その木クズが海の中に飛び込んで岩になったのだと伝えています。

コタンカラカムイの伝説は、この付近に、もう一つ残っています。チャラツナイの海中には、ニラス岩の倍以上も高い岩が立っています。下の方に四角い窓があいており、満潮時には、この窓から小舟が出入り出来たことから、和人は「窓岩」と呼んでいましたが、やがて東向きに穴が開いていることから蓬萊山(中国の伝説で、東海中にあって、仙人が住み、不老不死の地とされる霊山)に通じる道ということで、蓬萊門と名付けられました。

この蓬萊門をアイヌは「ムカルソ」または「ムカリショ」(マサカリ岩)と呼んでいました。

コタンカラカムイが、レプウンモシリ(アイヌの楽園)を創るのに、クワとオノと石づちを使いましたが、出来上がって天に帰る時にそれらの道具を投げ捨てて行ってしまいました。

捨てられた道具は、腐ってニツネカムイ(魔の神)になったり、悪い水や病気をおこす木になりましたが、オノだけはあまりに重いため、魔の神にもなれず、岩になってしまったのだといわれています。



4. イタンキ浜の伝説

イタンキというアイヌ語地名は、「おわん」の意味です。

昔、日高地方一帯が不漁に見舞われ、コタンの人々は飢え死にを迫られていました。そんな時、絵鞆コタンが豊漁だという話を聞き、日高アイヌは海岸伝いに胆振へ向かいました。

そして、ようやくの思いで白老コタンまでたどり着くと、絵鞆は豊漁どころか、天然痘が流行し、コタンの人々は山に逃げ隠れているとのことでした。しかし、いまさら日高へ引き返すわけにもいかず、ようやくアルトル(鷲別岬の西南側の土地)までたどり着いたところ、沖の方でクジラの死体が岸近くへ流れようとしているのを発見し、躍り上がって喜びました。

ところが、クジラと見えたのは、実はイタンキ浜の真ん中に見え隠れしているフンベシュマ(鯨岩：室蘭栄高校前の波間に見え隠れする岩)でした。空腹のあまり目も良く見えなかったのか、岩をクジラと見誤ったのです。クジラを食べられると思い、人々は流木をたき木にしながら、幾日もここで待ち続けました。やがて、たき木にする流木もなくなり、ついには自分たちの持ってきた「おわん」までも燃やして暖をとりました。

しかし、海中の岩がクジラになろうはずもなく、とうとう飢えと疲労で力尽き、全員ここで亡くなってしまったということです。

5. トツカリシヨの伝説

港口から離れた奇岩絶壁の東端であるトツカリシヨ。アイヌは、この地に月明りの夜にまつわる神話を語り伝えています。

レプウンモシリ(アイヌの楽園)に、まだ和人の移り住まぬ大昔のことでした。そのころも、月はこの美しい海岸に微笑んでいましたが、ニツネカムイ(魔の神)は、これがうらやましくてなりませんでした。自分も一度でよいから、月のように夜の天を支配してみたい...と、その機会を待っていました。

ある時、日の神が眠っているすきに「光の衣」を盗み、それを着て夜の空に現れたニツネカムイ。突如、空には二つの月が光り輝いたのです。驚いたアイヌたちは、夜眠ることも出来ず、天界に大きな異変が起きたに違いないと騒ぎ立てました。

アイヌの文化を守る神、オイナカムイは、ニツネカムイの仕業であることを見破り、銀の弓に銀の矢をつがえて、トツカリシヨにある岩からニツネカムイの偽の月を射ました。銀の矢は、はっしとばかりに命中。光の尾を引いてニツネカムイは墜落。光の衣は、たちまちオイナカムイの手で剥ぎ取られ、世界は再び平和を取り戻したということです。この時、矢を放った岩は、アトカニ岩(我ら矢を射るところ)と呼ばれています。

